しんらばんしょう
全面教育学研究会通信
2011.6.20　No.6

《４月例会報告》

コトワザ教育集成

科学的認識は、実験によって成立する。
宗教的認識は、信仰によってのみ成立する。
コトワザ的認識は、合点によってのみ成立する。
認識論によってコトワザを位置づける試みの集大成化。

コトワザの構造と認識の成立

庄司　和晃

コトワザがなぜ処世法として使われたり生きる力となり得るのかというと、それはコトワザの背後に真理や論理があるからだとまず定義づけがなされた。

認識論的にいってしまえば無意識の「合点」がなされてコトワザが伝承されたということであろうか。コトワザは、単に民衆の伝承で文化遺産であるという表層的評価ではなく、人々が思考しながら生きてきたということを、「合点」という言葉で納得させてくれた。書籍や文書がない時代に、生きるための知恵として､そういうことか、なるほど、ということが短い感性的論理を秘めたコトワザで連綿となされてきたのだ。

「案じるより団子汁」というコトワザは、言うまでもなく単なるダジャレで作られたわけではない。いつまでもくよくよしていても仕方がない、という教訓を伝えるために作られたことは容易に想像がつくのだが、ここに「届く言葉」というコトワザの強いアピールがあることに今回気づかされた。庄司さんが同僚のエピソードとして語られた「あんまり笑いすぎるとデベソになる」という警句は、一つの俗信として紹介されたが、他者に届く言葉として意識する必要がある。

多くの子どもたちを前に意識するのは「届く言葉」である。それは話者の気持ちなのか、目つきなのか、といろいろ言われるが、コトワザや俗信を自分の引き出しに荒れて自由に取り出せることができれば、一つの武器になるに違いない。

それにつけても「表通り」「裏通り」「魂通り」という枠組みには聞くたびに感心させられる。我々は「表通り」で勝負しがちだが「裏通り」は本音街道として重要だ。さらに「魂通り」の奥深さを思わずにはいられない。

コトワザは教育という手法で伝承された。ここでいう教育とは当然ながら学校教育を相対化し、人と人とのコミュニケーションという関係まで深めての教育であることを忘れてはならない。コトワザは一つのメッセージであり表現手段なのである。上

手に使いさえすれば、こんなすばらしい者はないと思わせる庄司先生の巻頭の話であった。

今回はコトワザ教育集成全１２ページの３枚分にあたる。次回も乞うご期待。

表通りから裏通りへ、そして魂通りへ

今回の庄司先生のレジュメの中にある「表通り」、「裏通り」、「魂通り」についてさまざまな意見が飛び交った。

表通りとは、人前などの公式の場面での表現のことだ。いわゆる建前・表向きの見解。裏通りは、表通りに対する本音や批判的な表現。そして魂通りは、死や身の細る不安や恐怖についての表現であると分類されている。

植垣さんは、昨年、群馬の小学校６年生がイジメが原因で自殺に追いやられた例を引き、学校や学級が表の建前だけでつながって本音が引き出せていないから防げなかったのではないかと問題提起をした。

それを受けた庄司さんは、エピソードを交え、我々の頃の４０代の教師は、ユーモアを交えて子どもたちの本音を引き出すのがうまく、すでにそこで授業が成立していた、と紹介してくれた。若い教師が授業がうまくいかないという場面を思い出すと分かる。教師が、子どもたちとの関係や本音を引き出しそれを自分の経験の中で租借して彼らに上手に返していくという技術が身についているかどうかにかかっているに違いない。

その武器の一つとしてコトワザや俗信があるのだ。そのコトワザには言うまでもなくさまざまなものがある。レジュメの「子どもとは何か」という創作コトワザを見ても「子どもの言葉に真理有り」というかと思えば「返事ばかりでやりもせず」という反対の捉えもある。そして「いたずら坊主のさびしがり」という鋭い観察眼もある。このように対象をさまざまに弁証法的に見ることで表の裏のバランスがとれていくのだと感じた。

尾崎さんは、震災のさまざまな発言をマスコミの中から拾い出すと、マニュアル通りの説明（表通り）、本音や批判の混じったコメント（裏通り）、そして生死をさまよった心に響く叫び（魂通り）などに分類されると感じたと発言した。そして「表通り」→「裏通り」→「魂通り」を三段階に理論化してみたらどうかという提案をした。それはここにも「のぼり」「おり」があるからだ。

庄司先生の戦時中の特攻隊員の経験によると、死を目前にした特攻隊員には、冗談を言ったり本音を言ったりという裏通り表現が日常では常にあったようだ。そういう揺れ動く心の状態があっても、出撃の目前にはきちんと遺書が書けたものだという。想像を絶する境遇の中で心の上り下りがあったことにきづく。

小田さんは、中沢新一が芸術人類学の中で魂の本音を引き出す魂通りを強調するあまりに、それが常套句になってしまって、魂通りのインパクトがなくなってきてしまったようだと最近の学問の状況を紹介した。　庄司先生は、そこで浄土真宗の親鸞や蓮如は宗教的なカリスマ性を駆使して初めて聴いたように捉えなさいと言ったという話は傾聴に値した。

武田さんは、現代の価値観が揺らぐ多様な時代に、コトワザという全方向のものの見方考え方は有効だという。そして極論を言えばコトワザの論理だけやっても十分に生き方は伝わるという。そしてこの「通り」という名付けが絶妙だという。安易に心の教育などといってしまう昨今の教育状況から見ても「魂通り」には深い教育哲学があ

るとまとめてくれた。

それぞれの通りは弁証法でつながっている。我々はさまざまな視点に立って言葉をえらび伝えようとしている。そしてどの通りからも心に届く言葉をえらばねばならないと感じた。そして、死の教育について東日本大震災があった今、もう一度考える必要があると感じた次第である。

授業「ひゆの研究」余録

向井 吉人

定年後、非常勤講師をつとめ、ますます元気な向井さんのレポート。庄司先生も言っていたように比喩の研究についてはまだ十分でないとのこと、向井さんのレポートは教科書の流れにはこだわらない自由な発想での展開となっています。詳しく紹介できませんが、比喩は言葉による視点の変化です。日常無意識に行われている言葉の力に気づく瞬間でもありました。

今回は、全面研会報２０１０年版の合評会でした。合評内容スペースがなく紹介できませんが、ラインアップは小田さんのホームページに掲載されましたのでご覧下さい。。１冊８００円で頒布しています。

＊　＊　＊

手紙文庫を被災地へ

小田 富英

かつて遠野市長は、もしも甚大な地震被害が起きたら遠野市が被災地救援の前線基地となる、と宣言しその準備に取りかかろうとしましたが、周辺ではそれに呼応する市町村はいなかったそうです。しかし現在、遠野市は釜石など岩手県被災地救援の全前線基地となっています。

小田さんからの連絡によると被災地の子どもたちに本を贈ろうという運動が遠野市で始まっているそうです。しかしただ贈るのではなくメッセージを添えるという趣向です。題して「手紙文庫」。メッセージを通して新たな交流が生まれることも願っているそうです。みなさんご協力を。私（徳永）の学級でも始めました。

全面研ホームページ準備中

尾崎 光弘

前会の二次会で、全面研のホームページのことが話題になりました。時期尚早という意見もありましたが、すでに開設している武田、小田両氏から強く開設の要請があり尾崎さんが「ホームページビルダー」によって作業を開始するそうです。全体のイメージやディテールなどについて次回例会で確認がありますのでみなさんの意見をお知らせ下さい。

＊　＊　＊

４月例会参加者：庄司、植垣、向井、武田、今沢、小田、波田地、登、尾崎、徳永

【７月例会のお知らせ】

日時：　**７月２日（土）**
　　１４：００～１７：００

場所：**成城学園**　正門脇案内所建物３Ｆ
　　控室（前会の奥の部屋です。）

内容：コトワザ及び認識論レポート
　　ホームページの確認
　　被災地への支援活動について

連絡は徳永まで（090-8721-5517）

震災に寄せて　柳田 國男『雪国の春』より「二十五箇年後」

唐桑浜の宿という部落では、家の数が四十戸足らずの中、ただ一戸だけ残って他はことごとくあの海嘯（つなみ）で潰れた。その残ったという家でも床の上に四尺上がり、時の間にさっと引いて、浮くほどの物は総て持っていってしまった。その上に男の子を一人亡くした。八つになるまことにおとなしい子だったそうである。道の傍らに店を出している婆さんの処に泊まりに往って、明日はどことかへ御参りに行くのだから、戻っているようにと迎えにやったが、おら詣りとうなござんすと言って遂に永遠に還って来なかった。

この話をした婦人はその折り十四歳であった。高潮の力に押し廻され、中の間の柱と蚕棚との間に挟まって、動かれなくなっている中に水が引き去り、後の岡の上で父がしきりに名を呼ぶので、登って往ったそうである。その晩はそれから家の薪を三百束ほど焚いたという。海の上からこの火の光を見掛けて、泳いで帰った者も大分あった。母親が自分と同じ中の間に、乳呑児と一緒にいて助かったことを、その時はまるで知らなかったそうである。母がどんなことがあってもこの子は放すまいと思って、左の手で精一杯抱えていた。乳房を含ませていたために、潮水は少しも飲まなかったが山の上に上がって夜通し焚火の傍にじっとしていたので、翌朝見ると赤児の顔から頭へかけて、煤の埃で胡麻あえのようになっていたそうである。その赤児が歩兵に出て、今年はもう帰って来ている。よっぽど孝行をして貰わにゃと、よく老母はいうそうである。

…しかしだいたいにおいて、話になるような話だけが、繰り返されて濃厚に語り伝えられ、不立文字の記録は年々にその冊数を減じつつあるかと思われる。この点は五十年前の維新史も同じである。自分は処々の荒浜に立ち止まって、古老達の不細工なる海嘯史論を聴かされた。これまた利害関係がなお多いために、十分適切とは認められぬが、一般の空気は明治の新政と等しく、人の境遇に善悪二様の変化のあったことを感じさせているようであった。

…三陸一帯によくいう文明年間の大高潮は、今はもう完全なる伝説である。峯のばらばら松を指さして、あれが昔の街道跡という類の話が多く、金石文などの遺跡は遺物は一つもない。明治二十九年の記念塔はこれに反して村ごとにあるが、恨み綿々などと書いた碑文も漢語で、もはやその前に立つ人もいない。村の人はただ専念に鰹節を削りまたは鰯を干している。歴史にもやはり烏賊のなま干し、または鰹のなまり節のような階段があるように感じられた。

『雪国の春』・「豆手帖」から一部抜粋

《注》「唐桑浜」：現在の気仙沼市唐桑浜町